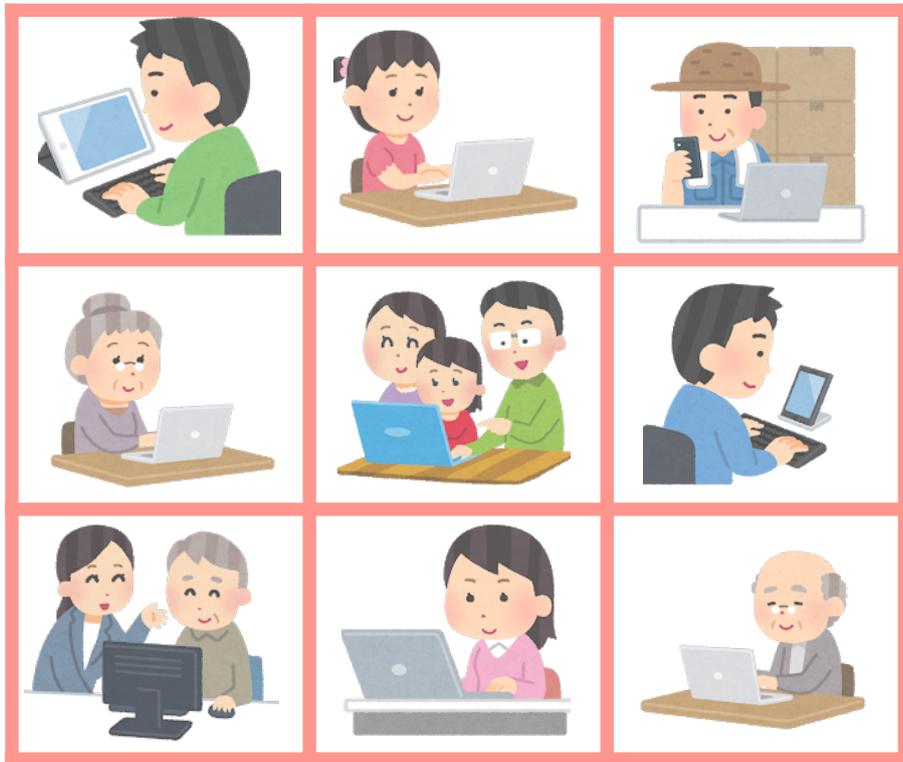




黒住教 ホームラーニング #4



黒住教は、備前岡山藩の守護神社・今村宮の神官であった黒住宗忠が、江戸時代（一八一四年）に開いた教派神道です。死を覚悟するほどの病を克服し、昇る朝日を拝む「日拝」の最中に天啓を得て、天照大御神と一体になるという宗教的体験をして立教しました。教祖宗忠神の教えは、一切万物すべての親神が天照大御神で、その尊いはたらきの中であらゆるものが存在するという世界観です。

ゆとり

天地の あめつち 中に なか 一つの ひとつ の まる ○きょうち
己 おの が心の こころ 住み家 すまいか なるらん（黒住宗忠）

ある時、宗忠が大勢の人の前で話をした時がありました。この日は人間関係の例え話として、次のように話しをした日のことです。

宗忠「人が茶碗ちawanを投げなてきたら、同じく茶碗で受けるようなことはせず、柔らかな真綿まわたで受け止めるようにしましょう。そうすれば、茶碗が音を立てたり、割れたりすることはありません」

すると、話を聞いていた一人の男が大きな声でくっつけてかかりました。

男「黒住先生、いくら真綿でも、茶碗を受け止めれば、少しくらいは音が鳴りませんか」

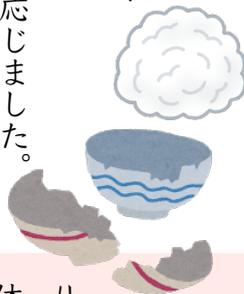
宗忠「はい、鳴りません」

興奮のあまり立ち上がり、宗忠に詰め寄って、男「本当に鳴りませんか」

じつとこれを聞いた宗忠は、やがてにこやかに応じました。

宗忠「いや、鳴りません、鳴りません」

男は「それみろ…」とばかりに得意げに座りましたが、この男の態度こそが、まさに茶碗を投げつけた行為そのものだったのです。



ポイント

その場に居た人々は、たった今、宗忠が自分で話していたことを実践し、男に投げられた茶碗を真綿で受け止めたのを見たのでした。

私たちの生活の中にも、この「茶碗と真綿」の話のように、どちらかが譲り、相手を立てる場面に出会うことがあるでしょう。そうした時、自分が率先して「真綿」になれるようにしていきたいものです。

☆このお話を読んで

あなたの体験から、あてはまる□に✓を入れてみてください。（複数回答可）

- 茶碗を投げたことがある
- 茶碗を投げたことはない
- 真綿になったことがある
- 真綿になったことはない
- その他（どちらもなかったことがない）

こういった時に、この「茶碗と真綿」のような場面になりましたか。簡単に結構ですので記述してください。その体験から、今後はどのようなようにすればよいかを自身の成功体験、または反省点をふくめてお書きください。ここでは、自分が「譲る」のがすべての正解ではなく、人間関係を円満にするためのヒントを得る学びでした。

○「黒住教ホームラーニング」では、黒住宗忠神の教えをわかりやすくお伝えすることを目指しています。本来であれば「教祖神」「宗忠神」等をはじめとした敬称の表記をするべきところを、編集上、あえて敬称を略した表現とさせていただいていることをおことわりいたします。

わら
笑い

いきものは心ひとつにあるものと

思えば誰もいきものとなる（黒住宗忠）

江戸時代後期のこと。岡山の町に、肺結核という重い病氣になつていた男性がいました。この病人をお見舞いした宗忠は、この人のためにお祈りをした後に話をしました。

「失礼ながらこの部屋はとても陰気です。長い間のご病氣で貴方の心が暗く沈んでしまうのは仕方の無いことかもしれませんが…。ご家族の皆さんも一緒に陰気になつてしまうのは良いことはありません。ありがたく、面白く、陽氣に生き生きと暮らしていくことが大切です。それが、天照大御神様の教えです。ぜひ、今日からは陽氣に暮らしていきましょう。それには笑うことが一番です。もう長いこと笑っていないのではありませんか。どうぞ、つとめてお笑いになりますように」



笑

その夜、病人は考えました。
「わざと笑う。つとめて笑う。」

それで病氣が治るなら、やってみるか…」

さっそく無理やり笑ってみましたが、もとより少しも面白くないものですから、ばかばかしいと思いやめようかと考えましたが、それでも氣を取り直して大きく口を開け「ハハハ」と声を出し続けました。しばらく笑ってはやめ、また始めては休み…と繰り返し返しているうちに、ふと、笑う練習をしている自分の影が壁にうつっているのが見えました。

ポイント

やせた病人が口を大きく開けて笑う練習をしている。その無理に笑おうとしている自分の姿が妙におかしくて、思わず本当に大笑いをしていました。すると、突然の大笑いに家族がかけつけ、病人とともに笑いました。すると、その家族の様子につられてまた、病人は大笑い。

久しぶりに笑つたので血のめぐりがよくなり、食欲も出てきました。そして、自然に陽氣な氣持ちになつて、どんどん快方へと向かい、やがて不治の病を乗り越えたのでした。

☆このお話を読んで

あなたはこのお話のように、病氣の時や心が深く沈んでいる時に、笑つて過ごすことはできそうですか。今の素直な氣持ちで□に✓を入れてみてください。

□笑うことができそうだが

□笑うことはできそうにない

□その他(その時になつてみないとわからない、など)

ここでの学びは、いつでも陽氣に笑つて過ごすのが良いというだけではなく「面白くないのに笑う」「ふとしたきっかけで本当に面白くなる」「家族もそれにつられて笑う」というところに学びのポイントがあります。自分自身が陽氣になる。その氣付きがある。周囲の人も陽氣になる…という流れの中に、私たちの日常生活や、ストレスに対する向き合い方のヒントがあるのでないでしょうか。

救い

天照らす 神の御内に 住みながら
われと魔道へ おつるあわれさ

(黒住宗忠)

宗忠が岡山の町を歩いてきた時のこと。井戸の周りに大勢の人だかりがありました。話を聞くと、この井戸に猫が落ちてしまっているのです。助けようというところでした。

小さな籠を紐の先につるして下げると「おぼれる者は藁をもつかむ」の諺どおり、猫はそれに乗ります。いい具合に引き上げて、もう少しで地上に出られるというところで、猫は自力で外に飛びだそうとして失敗し、井戸に落ち込んでしまいました。何度やっても同じことの繰り返しで、集まっていた人々も「やっぱり猫は動物だ。仕方のないやつだ」と、あきれられる人も出てきました。

その様子をじっと見ていた宗忠は、静かに涙を流しました。側に居た宗忠の弟子がわけを尋ねると、

「あの猫は、**私たち人間の姿です**。皆、同じような事をしていのです。天照大御神様は全ての生き物を生かそう、育てよう、助けようとしてくださっているのに、すぐに智恵をだして早まってしまふ。もう少しじっとしていれば助かるのに…。私たちも、助かりたいと願うのに、智恵をだしてもがいてしまふ。大御神様がどんなにもどかしく、憐れに思われ

ポイント

ているか…。それを思うと申し訳なくて、涙せずにはおられません」

宗忠は冒頭の和歌とは別に「身のつらき時には神が恋しくて助けられては神はそちよれ」という和歌を詠み、そうであってはいけませんよ、と示しました。人間は苦しい時には神頼みをし、その苦しさを忘れたら、神様のことも忘れる。あと少し我慢をすれば助かるというのに、それがわかからないので自分でもがき、苦しむことになる。そうなる神々も、猫を助けようとした人々と同じく「やっぱり人間は人間だ。仕方のないやつだ」とあきれながら様子を眺めているのかもしれない。神仏に救いを求めるとはどういうことなのかを学ぶお話でした。

☆このお話を読んで

あなたの体験から、あてはまる□に✓を入れてみてください。(複数回答可)

- 神仏に祈ったことがある(祈る気持ちがある)
- 神仏に祈ったことはない(祈る気持ちはない)
- 神仏に祈り、よい結果になったことがある
- 神仏に祈ったが、よい結果にならなかったことはない
- その他(いずれでもない)

✓を入れた項目にあてはまるエピソードを、ごく簡単に結構ですので記述して教えてください。



極意

天照らす神と人との一心の手綱ゆるさず 乗り給え君

(黒住宗忠)



宗忠は、各地に出かけてお話をすることが多く、弟子もたくさんいました。ある時、馬術(馬に上手に乗る技術)に優れた弟子がいました。弟子はすでに達人といえるくらいの腕前でしたが、更に上達したいとの思いから、宗忠にアドバイスを求めました。すると宗忠は「馬にお乗りなさるな」と応じました。すると弟子は宗忠の言葉を理解し、すぐ馬術の極意を得たということです。これはどういうことでしょうか。

馬術の世界では「鞍上に人なく、鞍下に馬なし」との格言があるそうです。乗る人と乗せる馬が一体になるという意味で「馬に乗っている自分を意識して、上手く馬を乗りこなそうとして乗っている限りは、真の達人の境地ではない」という極意を、宗忠の言葉で悟ったのでした。冒頭の和歌はこの時に宗忠が詠んで弟子に与えたものと伝わっています。同様に、備前岡山藩の剣術指南役へのアドバイスもたった一言でした。ある時、武者修行をして全国を渡り歩いているという武芸者が、剣術指南役に剣術の手合わせを申し込んできました。立ち合ってみるとなかなかの腕前で双方ゆずらず、数日後の再勝負に持ち越しとなりました。

ポイント

ポイント

剣術指南役は岡山藩の名前を背負う立場ですから、どうしても負けるわけにはいきません。そこで宗忠の話を聞くと、「勝とうとなさるな」との教えを受けたのでした。この言葉は指南役の心に通じ、大いに悟るところがありました。「なるほど、勝ちたいという気持ちで一杯だった。負けるわけにはいかぬ。勝たねばならぬ」と、そのことばかりに心がとられていた。数日後、平常心を取り戻して再び立ち合うと、間もなく相手の武芸者は竹刀を投げ出して降参しました。「今日は貴方の真の実力を拝見しました。とても私かなうものではありません。しかし貴方もお人が悪い。前回は本当の腕前を見せずに私をあしらわれるとは」と、二人は敬意を表し合ったのでした。

☆このお話を読んで

あなたがもし、武道やスポーツなどの経験者であれば、このお話に共感できる点があるのではないのでしょうか。芸術などの分野でもきつと同じで、共通することは「我」という自分の意志を超えたところに、極意と呼ばれる存在が見えてくるように思われます。あなたの人生経験から、極意とまではいかなくても、真剣に取り組んだ武道・芸術その他なんでも結構ですので、その時の様子、内容について記述して教えてください。



おわりに

今回の黒住教ホームラーニングでは「ゆとり」「笑い」「救い」「極意」の四つのテーマから学びました。それぞれの項目において、黒住教学院ホームページの専用フォームより簡単に記入、ご回答ください。このページをプリントアウトして、直接記入してお送りいただくこともできます。その場合は左欄に必要事項を明記の上、FAXにて送信してください。

氏名

あなたの
FAX番号

ゆとり

☆このお話を読んで

あなたの体験から、あてはまる□に✓を入れてみてください。(複数回答可)

- 茶碗を投げたことがある
- 茶碗を投げたことはない
- 真綿になったことがある
- 真綿になったことはない
- その他(どちらもなかったことがない)

どういった時に、この「茶碗と真綿」のような場面になりましたか。簡単に結構ですので記述してください。その体験から、今後はどのようにすればよいかを自身の成功体験、または反省点をふくめてお書きください。ここでは、自分が「譲る」のがすべての正解なのではなく、人間関係を円満にするためのヒントを得る学びでした。

<p>【記入例】この話を読んで、私は陽気に暮らすとはどういうこと…</p>	<p>コメント欄 【この欄には何も書かないでください】</p>
---------------------------------------	-------------------------------------



笑い

☆このお話を読んで

あなたはこのお話のように、病気の時や心が深く沈んでいる時に、笑って過ごすことはできそうですか。今の素直な気持ちで□に✓を入れてみてください。

- 笑うことができそう
- 笑うことはできそうにない
- その他(その時になってみないとわからない、など)

ここでの学びは、いつでも陽気に笑って過ごすのが良いというだけでなく、「面白くないのに笑う」「ふとしたきっかけで本当に面白くなる」「家族もそれにつられて笑う」というところに学びのポイントがあります。自分自身が陽気になる。その気付きがある。周囲の人も陽気になる…という流れの中に、私たちの日常生活や、ストレスに対する向き合い方のヒントがあるのでしようか。



	コメント欄
--	-------

	コメント欄
--	-------

